

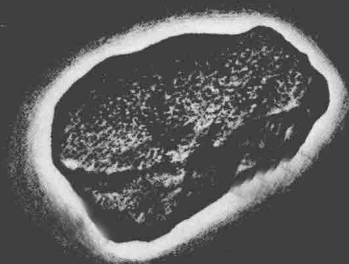
# 崩落

原さとし



原さといる

崩



落

崩落

九八〇円

昭和五十五年二月二十五日 第一刷  
昭和五十五年二月二十五日 第二刷

著者 原さとし

編集人 川合多喜夫

発行人 牧内節男

発行所 毎日新聞社

一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

五三〇 大阪市北区堂島

八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版

製本 大口製本

目次

序章 5

第一章 天狗山 12

第二章 エネルギ― 35

第三章 電気石 51

第四章 アラビア風邪 71

第五章 構造不況 100

第六章 爆破事件 141

第七章 電池事故 173

第八章 UP 23 223

終章 244



# 崩 落



## 序章

一九八四年一〇月三日、大東汽船所屬の第七アラビア丸は一路ベルシャ湾に船首を向けてインド洋を航海中であつた。三〇万トンの巨体を持つタンカーも広大なインド洋にあっては一つの点にすぎなかつた。第七アラビア丸は極端に自動化が進んでいて、一八人の船員しか乗っていない。そのなかの二人の船員が甲板に立つて沈もうとする太陽をじつとながめている。

「この光景は何度ながめても感激だな。おれはこれを楽しみでタンカーに乗っているようなものだ」

「ははは、お前は詩人だからな。おれはもうあきたよ。いよいよあと三日でベルシャ湾か。陸地が見えた時の方がおれはずっと好きだ。おれには町なかの方が性にあっているんだな」

「お前にはあの微妙な自然の変化がわからないのか。気の毒なやつだ。この都会人めが」

「気の毒でけっこう。それはそうと、アラビアでは悪質な風邪がはやっていると聞いたが、どうなんだい」

「おれも聞いた。死ぬといううわさをな。しかし、それは内陸部の村の話で、港の方はどうとい

うことはなさそうだがね」

「おい、船のスピードが遅くなったぞ。なにかあったのかな」

「なに気にすることはないさ。おれたちは非番なんだからな」

といっているうちに、スクリーンが逆回転する音が聞こえ、船のスピードは、急速に遅くなった。

「とうとう、止まったぞ。故障かな、行ってみよう」

二人はその場を離れた。操舵室に入ると、すでに、船長、航海長をはじめ、五人のスタッフが集まっていた。

「どうしたんですか、船長」

と詩人がいった。

「会社から停船命令が出た。インド洋上で待機せよといって来た」

「理由はなんですか」

「それがわからない。電波が急にみだれ出したんだ」

「中東で戦争でも始まったんですかね。とするとやっかいですね」と都会人が口を出した。

「いや日本が出る時には、まったくそんな気配はなかった。なにか起ったとすれば、別のことだ」

と船長が首をひねった。

「日本では石油の需要が増えているんですから石油はいくらでもほしいはずだ。こんな時の停船命令となるとかなり重大ななにかが起っていると考えざるを得ないですね。とすると、第三次世界大戦とか」

と都会人が大げさな身ぶりをした。

「君の考えは飛躍しすぎるよ」

と船長はいったものの、理由は他に思いつかない。船長は首をかしげざるを得なかった。

「船長、他にどんな理由があるというのですか。会社が倒産したって、停船命令は出さないでしょう。石油を積んで帰れば、少しは足しになるのですからね。帰国命令ならなんとなくわかりますよ。ぼくには停船命令という所がひっかかるんです。停船命令というのはいかにも中途半端ですからね。なにかが起り、その動向が予測出来ない時に、停船命令というのは出されるものでしょう。とすると、戦争などは理由としてびったしじゃないですか」

と都会人はさらにまくしたてた。

「それも、電波が正常に戻れば、わかることだ。君は通信の責任者なのだから、通信室へ行っってなんとかしてくれたまえ」

船長にこういわれると、引き下らざるを得なかった。都会人はすぐそこその場を離れた。通信室に入って行くと、

「ああ、通信長、会社と連絡がとれないのです」

と若い通信士が訴えるようにいった。

「通信機の故障じゃないのか」

「いえ、電波障害が原因であることはまちがいありません」

「そうか。それなら、単語だけでもわからないのか」

「いくつかわかっています。死者、禁止、危険、です」

「そいつはぶっそんな単語だな。君なら、どう解釈するね」

「飛行機事故や自動車事故で死者が出たって、停船命令は出ませんよね。とすると、戦争ですか。危険は、戦争で近づくと危険だということで、そのために、政府がペルシャ湾に近づくことを禁止した。つじつまは合いますよ」

「帰国命令じゃなくて、停船命令だという意味は」

「中東の戦争はいつでもすぐ終わりますからね。終わったら石油を積んで帰れということですよ」

「なるほど。しかし、エジプトとイスラエルの戦争の時は、停船命令なんて出なかったぞ」

「今度は、イランとサウジアラビアの戦争かもしれませんよ。そんなの小説で読んだことがあります。これならペルシャ湾には危険で近づけませんよね」

都会人はあり得ることだと考えながらも、そのまま賛成するわけにもいかない。

「おれがかわろう。君は食事をしてこい。船長に会ったら、今の単語の件を話しておくんだな」

「それではお願いします」

と通信士は行つてしまった。都会人は通信士がいた場所に坐り、必死に連絡をとろうと努力するがうまくいかない。その作業を四〇分ほど続けた時、後ろに人の気配を感じた。ふり返ると、そこには詩人が立っていた。

「おい、連絡がまだ取れないのか。食堂は今、大さわぎだぞ」

「どうしたんだ」

「戦争が始まったというじゃないか。通信士が得意になってしゃべりまくっているよ」

「あのバカ、とうとう戦争にしてみいやがったのか」

「というと、まだはつきりしないんだな」

「一つの推理にすぎないんだ。死者、禁止、危険、という単語からのね」

「なるほど、それなら他に解釈の余地はいくらでもあるな。ペルシャ湾に近づくと死者が出る危険があるから、接近が禁止された。というのは自然の解釈だ。直感的に戦争が頭に浮かぶが、はたして、戦争が始まった時、死者という言葉をやわざ使うかな。ペルシャ湾で戦争が始まったので、接近すればタンカーがまき込まれる危険があるので、インド洋で停船し、様子をみる。といつてくるはずだ」

「なるほど、死者というのは不自然だな。会社は船員よりもタンカーの危険を中心にいうはずだからな」

ここまでいった時、船長がとび込んで来た。

「おい、まだ連絡がつканのか」

「はい、まったくだめです」

「食堂では大さわぎだ。この船には一八人しか乗っていないからいいものの、昔のように百人以上も乗っていたら収拾がつかなくなるところだ」

「船長、例の単語のことは聞きましたか」

「ああ聞いたよ。あれじゃ、なにもわからないじゃないか」

「はい。なにかきな臭いことが起っているということ以外にはね」

「通信長、君はそれを戦争だといいたいんだろう」

「いえ、今も話していた所ですが、死者ということばを戦争と結びつけるのが不自然なのです」と都会人はその結論に到達する筋道について話した。

「なるほど。そういわれればそうだ。とすると他になにが考えられるね」

「一つだけ考えられます」

と詩人が口を出した。

「という」と

「風邪ですよ。だいぶ悪質な風邪がアラビアではやっているということを聞きました」

「風邪だって。風邪でタンカーを止めるなんて、そんなばかなことがあるものか」

「いえ、風邪なら死者という言葉がびったりきます。現に、この風邪では死者が出ているという話を聞いています」

「日本で風邪がはやる時だって、十人や二十人の死者が出るのは普通じゃないか」

「でも、何十万人も、何百万人も死者が出る風邪ならどうします。それがアラビアではやりはじめて、日本政府はその流行を防ごうとしている。つじつまが合いますよ、船長」

「しかし、たかが風邪でね。スペイン風邪という例がないわけではないが。タンカーが中東に近づけなければ日本経済が崩壊してしまうことがはっきりしている時にだよ。政府はそんな思い切った政策がとれるかね」

船長のいわんとするところは詩人にもよくわかった。詩人は考え込まざるを得なかった。

## 第一章 天狗山

「あの山には言い伝えがあつてな。わしなど子供の頃には年寄りからよく聞かされたもんだ」

と老人は視線を山に向け沈黙した。しわだらけのその顔にはなんともいえない憂いがあった。

「その言い伝えについてお話をうかがいに來たのです。くわしく話していただけませんか」

と男は好奇心に満ちた顔を老人に向けた。老人は視線を山から離さず、ゆっくりした口調で話を始めた。

「あそこには天狗がおつてな。近寄ると食われてしまうと年寄りからよくおどかされたもんだ。そだから、昔はだれも天狗山には登らなかつた。それが、村の若いもんのなかに元気な男があつてな。天狗をつかまえにいくといひ出した。これには村のもんはみな反対した。わしも青年団に入つてはいたが、とめてもきかんで、ほかの二人の若いもんと、とうとうあそこに登つただよ。ところが、二日たつても三日たつても降りてこねえ。青年団で相談して、大勢して探しにいった。いわんこっちゃねえ。三人とも死んでゐるのが見つかつただよ」

「おじいさん、それはどんな死に方だったんです。天狗にやられたんですか」

男は興奮をおさえきれず、口調を早めた。

「普通の死に方でねえ。雷に打たれて死んだ人間を見たことがある男が青年団におってな。それと同じだといひ出しただ。それにおかしいことには三人とも前を出したまんまだったな。医者にも見てもらっただが、やっぱり雷に打たれたといっただ。だけど、その日の前一週間ばかりは、稲光りさえ見た者がいねえ。しまいには、なんで死んだかわかんなくなつて、天狗にやられたというにおちついただ。昭和五年頃のことだったべかな。それからしばらく天狗山に登るものはいなくなつただよ」

「それで最近はどうなんです、おじいさん」

「このごろは言い伝えなど信ずるものはおらんからな。平気で登るようになっただな。だけど、なんにもない山だで、そうちよく登ることもねえがの」

「それで、事故は起らないんですか、おじいさん」

「聞かんなあ。天狗も死んだだべえよ」

「そうですか。ところで、おじいさんは三人の死体が発見された場所は覚えておりますか」

「そりゃあ、覚えておるわな。わしの仲良しも死んだだからな。行つてみれば、すぐわかるべえが、てつぺんからちよつと降りた所に三本の大きな杉の木が並んでおつてな。三人が見つかったのはその根本だ。それがあつてから三本の杉の木に三人の名前がつけられただよ。権助、清太、多聞だ」

と老人は、再び遠くを見つめる顔つきになった。男はその老人の顔をしばらくながめていたが、さらに質問を続けた。

「その他に、天狗山にまつわる話がありましたら聞かせていただけますか」

「そうよな。天狗山の中腹よりちょっと下に、小さな沼があるだ。天狗が水遊びをするというんで、たらい沼という名がついているだ。天狗がこの沼にちよくちよく出るといって、だれも近づいちゃいけないことになっていただ。もっと昔には、年に一度は村の娘がいけにえとしてさし出されたという話を聞いたことがあるだ」

「それで、おじいさん、たらい沼で現になにかが起ったんですか」

男は身乗り出すようにして、話をうながした。

「わしは、直接に見たことはねえが、心中があっただよ」

「それはいつのことですか」

「十年ぐれい前のことだったべかな」

「そうですか。いろいろありますがうございました。また話を聞きに来るかもしれませんが、その時はよろしくお願いします」

と男はいつて、頭を下げた。

「わざわざ、言い伝えを聞きに来るなんて、あんたもかわりもんだな。道などないかもしれんから、気をつけていきなよ」